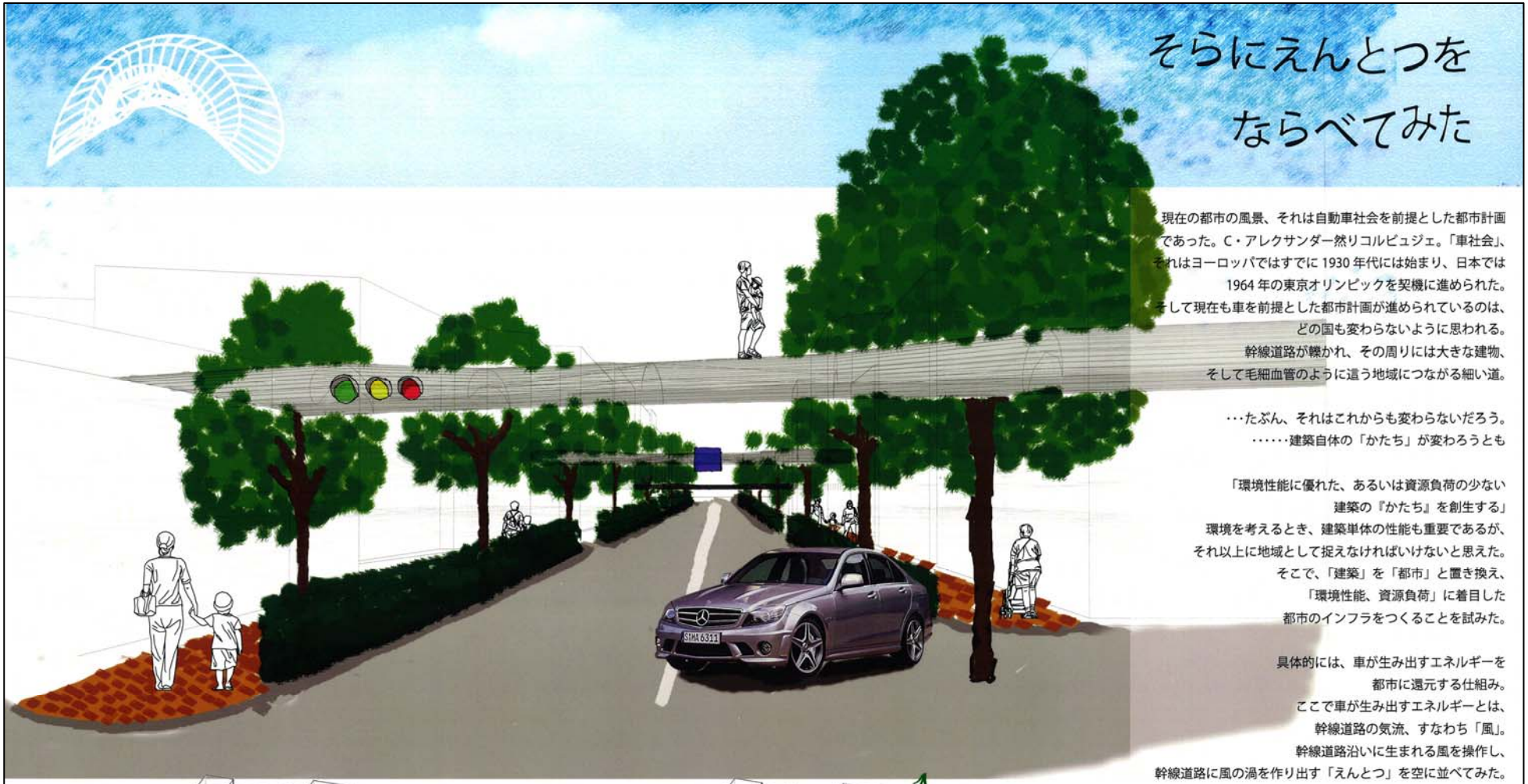
そらにえんとつを ならべてみた

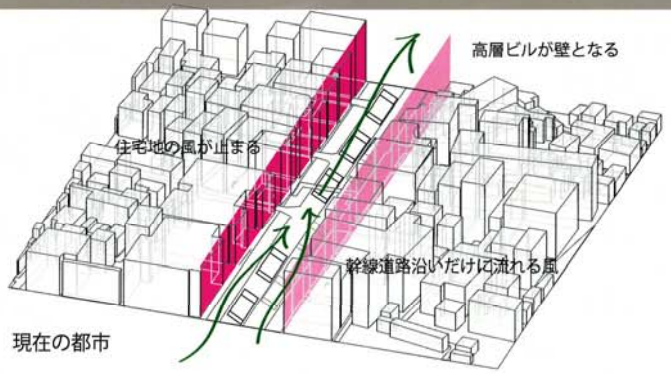


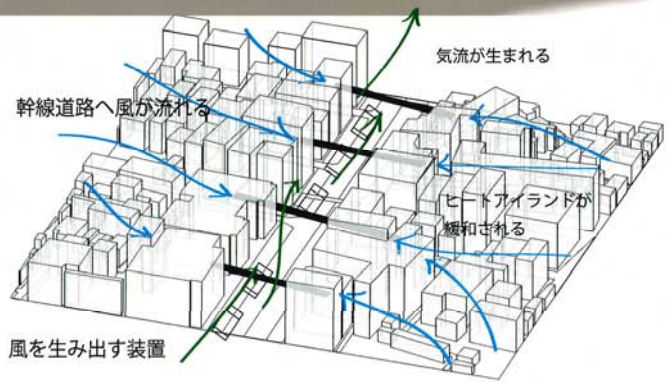
現在の都市の風景、それは自動車社会を前提とした都市計画であった。C・アレクサンダー然りコルビュジェ。「車社会」、それはヨーロッパではすでに 1930 年代には始まり、日本では 1964 年の東京オリンピックを契機に進められた。そして現在も車を前提とした都市計画が進められているのは、どの国も変わらないように思われる。
幹線道路が轢かれ、その周りには大きな建物、そして毛細血管のように這う地域につながる細い道。

・・・たぶん、それはこれからも変わらないだろう。
・・・・・・建築自体の「かたち」が変わろうとも

「環境性能に優れた、あるいは資源負荷の少ない建築の『かたち』を創生する」
環境を考えるとき、建築単体の性能も重要であるが、それ以上に地域として捉えなければいけないと思えた。
そこで、「建築」を「都市」と置き換え、「環境性能、資源負荷」に着目した都市のインフラをつくることを試みた。

具体的には、車が生み出すエネルギーを都市に還元する仕組み。
ここで車が生み出すエネルギーとは、幹線道路の気流、すなわち「風」。
幹線道路沿いに生まれる風を操作し、幹線道路に風の渦を作り出す「えんとつ」を空に並べてみた。





■都市問題

幹線道路沿いには高層ビルが並立し、その裏側に小さな建物が建っている。
幹線道路を通る風はビルが壁となり、裏側には風が流れていかなず、車が生むエネルギーが無駄となっている。
そこで、「えんとつ」を通し、車の作る風で幹線道路上空を負圧にし、気流を都市全体に生み出すことを考える。
この「えんとつ」には信号機、看板、街灯、そして歩道橋としても機能する。
「えんとつ」が浮かぶパースペクティブは幹線道路の新しい風景となる。